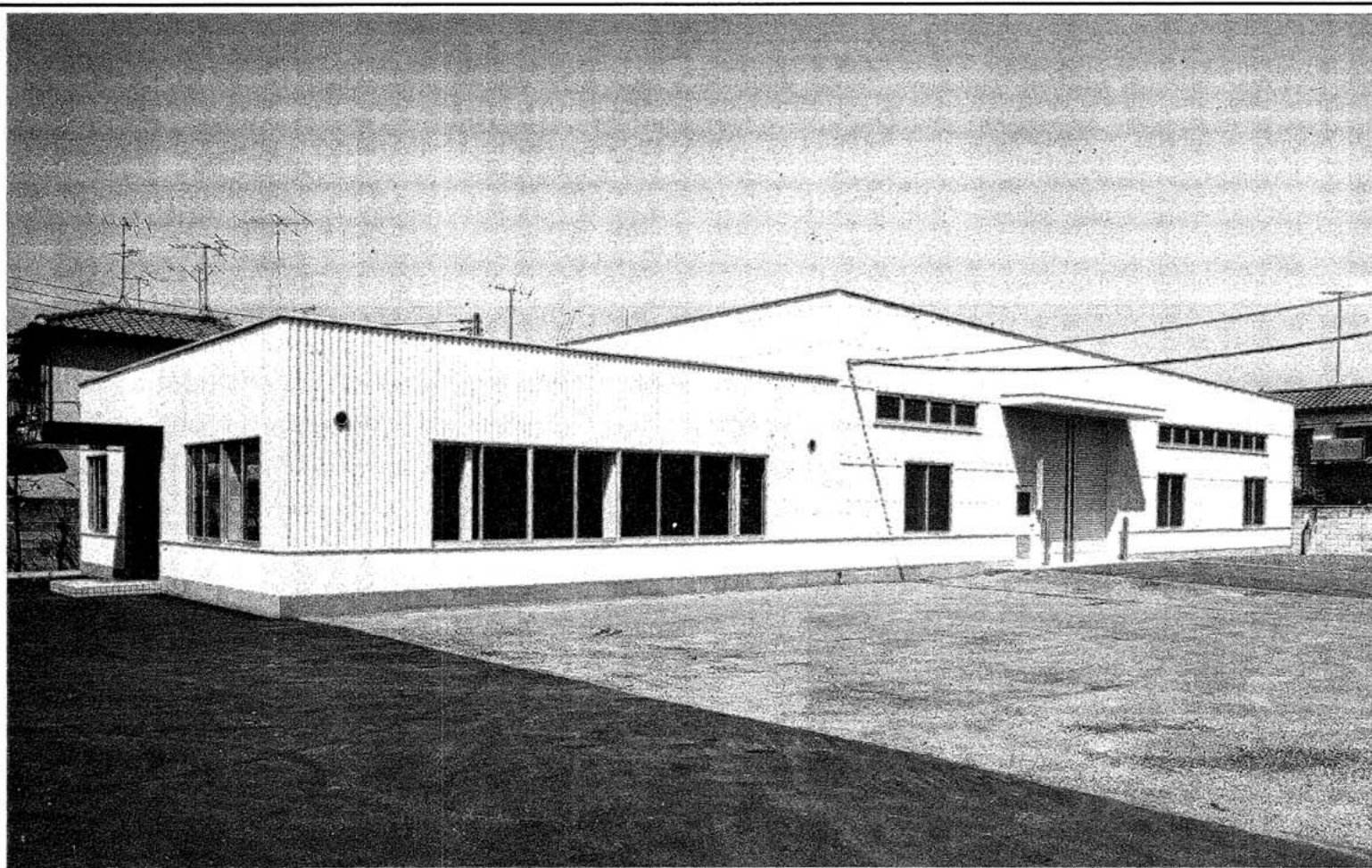


三笠ニューズ

発行所

東京都千代田区猿樂町1-4-3
三笠産業株式会社
電話 東京(292)1411 大代表
テレックス 222~4607
郵便番号 101
PR旬報 年4回発行



(三笠産業部品サービスセンター、左手の屋根の低い部分が事務所棟)

創立五十周年を記念し

部品サービスセンターと

防音テスト室を建設

サービスと研究体制を強化

三笠産業の創立五十周年を記念して、埼玉県春日部市緑町に部品サービスセンターを、そして埼玉県白岡町の技術研究所には防音テスト室を建設した。この完成により部品の供給サービスならびに実験研究体制が更に強まった。これらの建物の設計は技術研究所や仙台、札幌の営業所を手がけた渡辺建築事務所が担当。施工は鶴林、春日部の両工場を建てた石橋建設工業が行った。春日部・白岡二ヶ所の工事は二月初旬から始まり四月一杯で無事完了。去る五月十一日(月)大安吉日に関係者が集り落成式が行われた。

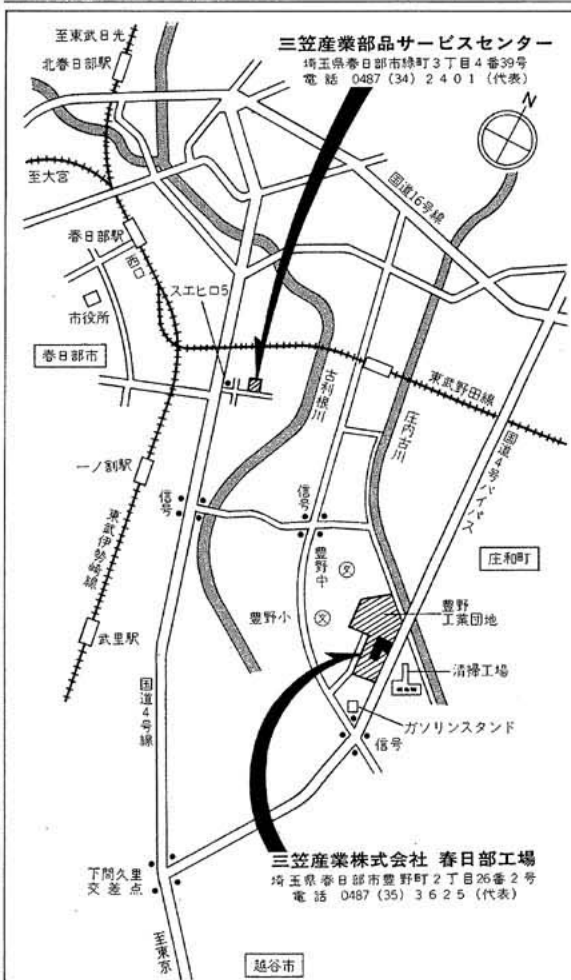
部品サービスセンター

部品サービスセンターが建てられた場所は、二年前に市内の豊野工業団地に移転するまで春日部工場があったところで、当時の建物がそのまま残っている。三、〇三二㎡の敷地を使用目的に合わせて活かすため、以前使っていた建物は二棟だけ残してすべて取り払い、その後鉄骨造り平屋建ての事務所が一棟になった四三八㎡の建物が一棟できた。これに従来の建物を一棟を加えると、部品サービスセンター全体の規模は九五六㎡となる。今回新築された事務所の正面入口から入ると、部品課、サービス課などの机の奥にコンピュータ等の事務機器が置かれ、ガラス窓越しに部品倉庫と連絡がとれるようになっている。

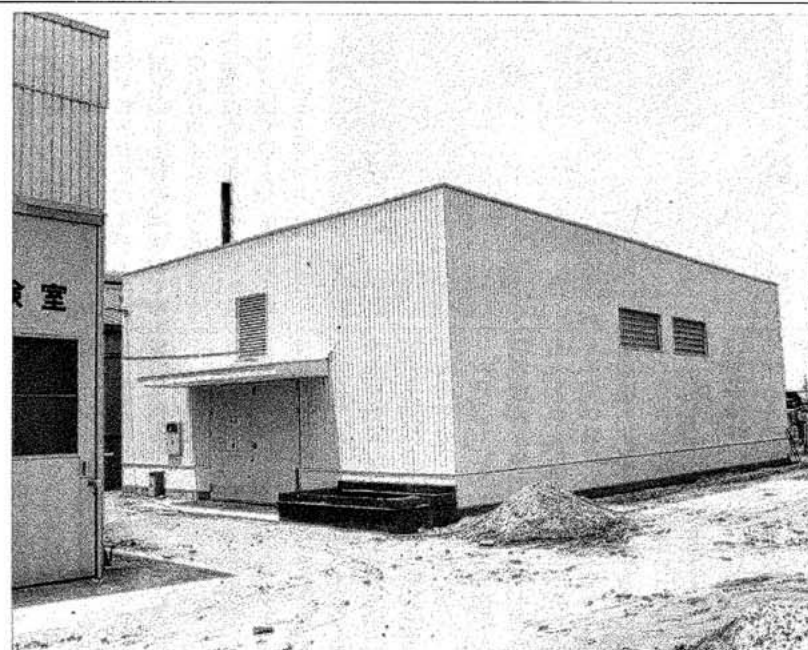
防音テスト室

部品倉庫のなかには、上段下段に分けられて、機種毎に区分された棚が整然と連なる。階段を登った上段の床も部品棚の列である。ここに置かれている部品はすべてアフターサービス用のもので、受注、売上げ、在庫などの部品の管理はコンピュータ処理され、お客様のお手もとに迅速的確にお届けできて皆さまにご迷惑をかけることも少くなり、ひいては売上げ増強にも

つながる。新編成の営業サービス部が春日部に移ったのは六月一日(月)。直ちに部品サービスセンターとして業務を開始したが、本社から移転したばかりの当初は多少勝手が違い、とまどいはあったようだ。しかし従来からの手馴れた部品課のメンバー揃いなので、軌道に乗るのには時間がかからなかった。以前は工場として使っていた二棟の建物は、外装に手を加えて、すっかりきれいななり、生産用の部品を保管する倉庫と修理品の受入点検の場として蘇り、部品サービスセンターの一翼を担うことになった。



三笠産業は過ぐる創立四十周年には技術研究所をつくり開発と研究の体制を固めたが、このようにしていままた創立五十周年を期に、実験研究の強化と共に、



(技術研究所内に完成した防音テスト室)

るため200V電源と高周波電源が設置されている。試験施設の完備により新製品開発のスピードアップが期待される。

三笠産業
部品サービスセンター
埼玉県春日部市緑町
三丁目四番三十九号
電話〇四八七(34)二四〇一代

三笠産業創立五十周年

記念祝賀パーティー盛大に行なわれる

三笠産業の創立五十周年記念祝賀パーティーが、四月八日(水)東京のホテルオークラ「平安の間」に於いて開かれ、代理店、商社、仕入先など、約五〇〇名のお客様をお招きして、盛大に行われた。

当日は好天に恵まれ、会場受付には早くから各地のお客様がおいえになり、ロビーのあちこちで談笑される姿が見られた。そして定刻、京谷社長以下三笠の役員が出席する中、続々と会場に入られたお客様方は飲み物を片手にあちこちに歓談の輪を作られたり、藤家虹二クインテット&ザ・キャプスのスタンダードナンバーに耳を傾けたり、思い思いにくつろいでいた。

しばらくして挨拶に立った京谷社長は「激しい時勢の変遷のなか、ここに五十年という歴史を刻んで、今日をみるに至りました。ひとえに本日お越しを頂きました皆様方の長年にわたるご愛顧と指導の賜ものと、心から感謝申し上げる次第でございます。三笠は昭和十二年孤々の声をあげました。爾来、今日まで、戦時下、そして戦後の混乱の時を乗り越えて、特殊建設機械メーカーとしての基盤を確立することができました。」

思えばこれも、今はなき創業者社長京谷弘道を始めとする諸先輩の時代を先取りする先見性と、不撓不屈の情熱があったればこそ、よき伝統よき社風を基礎とした今日の三笠が在り得たものと、改めて心からなる感謝を捧げるものであります。これからの三笠を担う私達は、この輝かしい伝統を受けつぎ、創業のバイタリティをよみがえらせて、次の五十年、新たな半世紀に向けて歩を進めてまいります。

三笠は本日を持ちまして創立五十周年を迎えました。激しい時勢の変遷のなか、ここに五十年という歴史を刻んで、今日をみるに至りました。ひとえに本日お越しを頂きました皆様方の長年にわたるご愛顧と指導の賜ものと、心から感謝申し上げる次第でございます。三笠は昭和十二年孤々の声をあげました。爾来、今日まで、戦時下、そして戦後の混乱の時を乗り越えて、特殊建設機械メーカーとしての基盤を確立することができました。」

思えばこれも、今はなき創業者社長京谷弘道を始めとする諸先輩の時代を先取りする先見性と、不撓不屈の情熱があったればこそ、よき伝統よき社風を基礎とした今日の三笠が在り得たものと、改めて心からなる感謝を捧げるものであります。これからの三笠を担う私達は、この輝かしい伝統を受けつぎ、創業のバイタリティをよみがえらせて、次の五十年、新たな半世紀に向けて歩を進めてまいります。

現在の経営を取り巻く環境は、厳しい国際化の時代を迎えて、混迷の度を深めております。しかし、そうした困難や逆境にあってもひるむことなく、常に明るい希望を持つことの心が、自からを励まし、また周りの人々の共感と支持を得て、より良い明日を築くことが出来るものと信じております。そして今日よりは、三笠の全員がこの信念のもとに、一致協力してわれわれに課されました三笠永遠の発展のため断固として努めてまいれる所存でございます。何卒皆様方におかれましては、

変らぬご支援とご協力を心からお願い申し上げます。尚本年は、三笠製品の西部総発売元、三笠建設機械株式会社におかれましては、栄えある創立三十周年を迎えることになり、本席には小野社長ご夫妻を始め幹部社員の方々もまいっておりまして、弊社共々、お祝いを賜りますならばこれに過ぎる幸せはございません。終りに臨みご列席皆様様の御健康を心からお祈り申し上げます。御礼のことばとさせていただきます。本日は本当に有難うございました。



(挨拶する京谷社長)

三笠産業の創立五十周年記念祝賀パーティーが、四月八日(水)東京のホテルオークラ「平安の間」に於いて開かれ、代理店、商社、仕入先など、約五〇〇名のお客様をお招きして、盛大に行われた。



盛況の祝賀パーティーの様相



MVC-40

持ち運び簡単 耐久性を重視 ミニプレート MVC-40 新登場

今年の流行はミニ。と言ってもスカートのことではない。軽薄短小の時代と言われているが、今春発売したコンクリートカッターMCD-02/04「ミニカッター」に続き、今度はプレートコンパクターに小型軽量で取扱いと持運びがらくなミニプレートが登場した。

今年発表のプレートコンパクターMVC-40は重量わずか44kgまさに「ミニプレート」。ハンドルの手許への振動は低く抑えられた。設計に際して、機体が小さいだけに防振装置の取付位置関係とハンドルの振動を除くためのバランスのとれた、に苦心したそうである。

小型軽量と言いつつ、いやな感じを抱かれる向きもあるかも知れないが、MVC-40の輾圧盤は厚板を使い耐久性も重視している。当然のことながら摩耗に強いと言いうことが出来る。輾圧盤の幅は290mmに抑えられた。上部構造の機体幅はこの数字より小さい。これもMVC-40の大きな特長で、管理設工事などで掘削した狭い溝のなかに入ることが可能となった。このような溝内作業のためだけでなく、エンジン保護のためガードフレームを設けている。これを利用して、ハンドルだけでなくガードフレームにも手を添えて作業をするという狭い場所でも扱い易く、小型軽量機の利点が生かせるようにガードフレームは使用勝手の向上にも役立っている。この他に移動運搬の際にはガードフレームはリフティングフックとしても使われる。

MVC-40に搭載するエンジンは、溝内作業に使うため機体全幅の制限もあったが、いろいろな機械に多く使用されている信頼性のあるエンジンを採用基準とした。特殊なものを使っている部品の供給がむずかしくなり、お客さまに迷惑をかけないよう、にこの設計者の配慮である。ロビンEC08D空冷2サイクル3.3PSエンジンはMT-50ランマーに使われているのと同種で、部品供給も容易にできる。



ミニサイズ、移動もらくらく。ハンドルの折畳むと。ミニサイズ、移動もらくらく。



表層仕上作業中のMVC-40。表層仕上作業中のMVC-40。

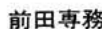


三笠産業の監査役
桜電機株式会社の加藤 弘氏逝去

三笠産業の創立五十周年記念祝賀パーティーが、四月八日(水)東京のホテルオークラ「平安の間」に於いて開かれ、代理店、商社、仕入先など、約五〇〇名のお客様をお招きして、盛大に行われた。

MVC-40プレートコンパクター仕様	
機体の寸法	高 810mm
	幅 290mm
	輾圧盤の寸法
輾圧盤の寸法	長 790mm
	幅 420mm
	輾圧盤の寸法
振動数	290mm
	6,200v.p.m.
	22~25m/min
登坂能力	20°
	700kg
	ロビンEC08D
遠心力	3.3ps2サイクル
	44kg
	装備重量

青森市中央四—十二—五



標高一五〇〇メートル級の山々からなる雄大な八甲田連峰をすぐ南に迎ぎ、国際海峡である津軽海峡を北に望む青森市は、本州最北端の県庁所在地である。江戸時代初期までは、善知鳥（とく）と呼ばれ、津軽藩の一寒村であったが、第二代藩主津軽信枚（のぶ）公の時に領内の物産を東廻りの大平洋岸沿いに江戸へ直送出来る理由のもと、貿易港として着され、寛永元年（一六二四）、磯松が繁る小高い丘が、入港する漁船から年中青々とした森に見えるといわれていた事から、青森という地名に改められ、まちづくりが始められたといわれている。

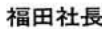
積雪量は、県庁所在地としては日本一ではないかと思われる

積雪量は、県庁所在地としては日本一ではないかと思われるくらい多く厳しい冬が続く。しかし春ともなれば、市内から八甲田山を縦断し十和田湖へ抜けける観光ルートは「雪の回廊」となり、道路の両側には七メートルを超える雪の壁が迫ってきて

訪ねて

幸和機械株式会社

能代市浅内字横道十九—



能代市は秋田県の西北部を流れる米代川の下流一帯を占め、人口五万九千人、木材、農業の県北中心都市である。

蝦夷征伐を行った斉明天皇（第三十七代）時代の記録斉明記によれば大和朝時代阿部比羅夫が軍船百八十隻を率いて蝦夷征伐の為に上陸したのが能代港だといわれ、日本海沿都市では最も古い歴史を持つ地である。

そのうち木材、米、金銀銅等の諸産物の盛んな積出港として大いに開けたのであるが、元禄七年（一六九四年）と宝永元年の二度の地震に遇い住民は苦しみを受けたので、この頃の「野代」と云う地名は天災地変を招き「野に代る」を意味し、むしろ「能く代る」「能代」になったと云う。今日では秋田杉による木材の町として全国的に有名で



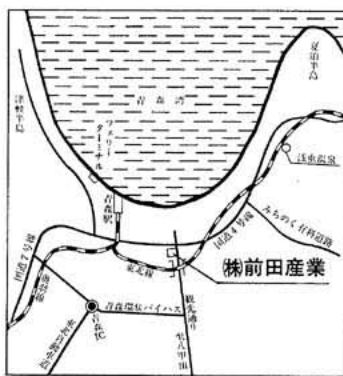
の部分、を倒す仕掛け等が工夫された大灯ろうが若衆や引手によって数台繰り出され流麗な笛の音と勇壮な太鼓の音に田楽をかざし夜の町を練り歩き、七日には夏祭りの最後をかざる「シャチ流し」が市内中央をつらぬく米代川に於いて一大絵巻として繰り広げられます。そしてこの祭りの先導にいつも明るく若々



通る者を圧倒する。また郊外の河川ではアメマス（オシヨロコマ）に似た降海型のイワナ）やシマウオが銀鱗を踊らせる。夏には、東北三大祭の一つ「ねぶた祭」が開かれる。坂上田村麻呂公の蝦夷征伐の故事にならって始まったといわれるが、定説は無い。ねぶた（台車の上に乗った武者絵を型どった一種の行燈）に燈が入ると、ハネトと呼ばれ

る踊り手がねぶた囃子に合わせる「ラッセラ、ラッセラ」とかねぶたの前後を踊り歩く。短い北国の夏を存分に謳歌するダイナミックな祭である。実りの秋ともなると小さまざまな林檎が色鮮かに商店の店先を飾り視覚、臭覚そして味覚を楽しませてくれる。また三方を海に囲まれているので魚介類の宝庫でもあり、暖寒流両方の魚の種類も豊富である。さて青森県の古くからの代理店である(株)前田産業さん(社長前田サエ氏)は、国道四号線、七号線と並ぶ青森市のメインストリートで通称「観光通り」と市民から親しまれている所に位置し、丁度前述した八甲田、十和田湖観光の起点にあたる場所である。朝八時に訪問すると、当然の事ながら皆さんすでに出社されており、前田専務さんの陣頭指揮のもと各セクションの皆さんがキビキビと仕事をされており、それは電

話の受け答え、あるいは出入するお客さんに対する接客姿勢にも現われており、朝の苦手な私も再度目を覚まされるといったような次第です。営業エリアは、青森市を中心にした県央部、弘前、五所川原を軸とした津軽地方をフォローされ、さらには七戸、十和田といった県東部まで足を伸ばされ、三笠製品を軸に建設機械を販売されている。機械を販売するには先ずアフターサービスといわれるが、前田産業さんはこの点でも永年尽力されて、製品在庫は勿論の事、部品の在庫も豊富。「迅速かつ正確」をモットーにサービス活動をされており、時々々は製造中止されている機械でさえ責任をもつて処理されているので地元ユーザーさんから絶大な信用を得



ていらっしやる。ここ数年来ていたが、需要の低迷が言われてきたが、国の大型補正予算の策定や、来年には実用に供される青函トンネルの使用開始を記念しての青函博覧会の開催決定等、明るい話題も多くなっている。まさに長い海底トンネルの出口が見えてきたと言えよう。

前田産業さんの今後ますますのご発展と三笠産業との連帯の輪がさらに大きくなることを期待するとともに微力ながら努力をさせていただきます。

小笠原 記

「ハイパー」

ターで
パーティーを」
アメリカ出張顚末記（その二）

の出来事
に私にあ
か閉まる
さんが駆
ぬまるド
おげたの
強引にド
記憶があ

日本から視察にこられていたボ
ンブメーカーM社のN氏とT氏
の両名、商社マンY氏、三笠か
らは部長と私、そして例の少し
太ったおじさん（カバに似てい
た）である。

さて、こうしてエレベーター
に閉じ込められた我々は、とり
あえず、そこらじゅうのスイツ
チを押してみたり、ドアを押し

Map of the Katsuragi area showing the Katsuragi River, the Katsuragi Dam, and the Katsuragi Industrial Zone. The map includes labels for the river, the dam, the industrial zone, and the surrounding area.

ともかく、それでエレベーターが下へ動きだした。いや、動き出したと思つたら、いきなりゴツンという音とともに、ドアが開いた。そして、25階と26階のちょうど中間あたりでゆっくりと止まつてしまつたのだ。駆け込んできたおじさんが両手を左右に広げながら首をすくめてみせた。あつけにとられた一瞬

「あのう、私、これから、空

しくて元気な幸和機械の福田社長さんの姿をみつけることが出来ます。とにかく社長はタフである。その秘訣は毎朝五時半におきての十キロメートルから二十キロメートルのジョギングにある。この二年間は雨や雪が降っても出張先であろうが欠かしたことが無い。近頃は休日というマラソン大会に出場し、十

十七年には国道一〇一号線沿いの取引各社の需要拡大に対応すべく峰浜対に北支店を設置、八森・深浦方面までの業務のスピード化をされ、今や秋田県屈指のレンタル業及び建機商社に成長された。秋田沖地震の時、能代市も大被害を受けたが、いち早く全社員徹夜で復旧現場に機械資材を届けて回られた。そんな

ある。三笠全製品を販売、リースとも、とりそろえておられ、近い将来東北で三笠の売上トップ代理店になる様頑張っている。大型機械、ミニダンパー、工具資材、鋼管パイプ、工具、又足場のリース等営業、販売、リースされており、能代火力発電所の建設等今後益々忙しくなれると思われる、幸和機

分の顔の中でも最も間で、お互いに顔を見合するものである。

「何だ、何だ？」

「どうした、どうした」

「どうしたもこうした動かなくなってしまうから故障らしい。こうしエレベーターに閉じ込められたのだ。」

「……」
「でもない。
ただのか
で我々はめられる

てはならないのですが、家へ帰りたいのです。しかし困ったなあ」とカバ氏。

ああそうですか。それは大変ですね、言いながら、心の中では空気の消費量はこの人が一番多いだろうな、なんて考えていた。

一つづーく――

藤岡記

られてゐる。福田社長さんには東北三笠レンタル会設立以来理事をお願い致しており秋田県リース業協会の副会長もなされ、協会内でも重要な存在の方である。

五社を数える業者さんがコンクリート打設工事を行ったが、その中なんと十四の業者さんまでが三笠高周波バイプレーターを使用され、それが全て幸和機械

す。
ご健勝を心から祈念申し上げます。

小林 記

秋田県における位置図



に着いた。ここで開催
R A ショー（米国レン
では最大規模の展示会
回各地で開催される。一
械も米国総代理店MQ
で毎年出品されている
するためである。今日

とされるA
ブル業界
で毎年一
二笠の機
位を通し
を視察
ぶ、ニュ



小林
記



(ニューオーリンズにて筆者)

